

Title	湖北省神農架の漢族の創世神話：『黑暗伝』考
Sub Title	A study of Hei'an zhuan : Han mythology in Shennongjia, Hubei Province
Author	谷野, 典之(Tanino, Noriyuki)
Publisher	三田史学会
Publication year	1997
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.66, No.4 (1997. 7) ,p.137(613)- 162(638)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	シンポジウム中国神話学の現在
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19970700-0137

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

湖北省神農架の漢族の創世神話——『黑暗伝』考

谷野典之

一 神農架『黑暗伝』とはなにか

四川盆地と陝西省を隔てる大山脈、大巴山は東に向かうにしたがつて高度を上げ、湖北省北西部の大神農架峰（標高三〇五三メートル）に至る。長江三峡はちょうどこの大神農架峰の山塊の南山麓にあたる。その大神農架峰から北に広がる山地は神農架林区と称される大森林地帯となつてゐる。この地域はきわめて特殊な動植物相を持ち、金絲猴やパンダなどの生息地として知られるが、それにも増して神農架の名を高めたのは七十年代から八十年代にかけての相次ぐ「野人」の目撃報告であろう。⁽¹⁾昨今ではその後の消息も聞こえてこなくなつたが、当時の狂騒を知る人の脳裏には神農架といういかにも神秘的な響きを持つ地名が刻みつけられてゐるに違いない。

その野人ブームも一段落したころ、この神農架で特異な内容をもつ伝承テキストが発見された。それが『黑暗伝』である。一九八三年、中国民間文芸家協会湖北分会が神農架に伝わる民間歌謡の調査を行なつた際、当時六十余才の歌い手張忠臣の所蔵する『黑暗伝』と題された三千行余りにわたる長大な写本に行き当たつた。その内容は混沌から始まる天地の起源、盤古の天地開闢、兄妹婚型洪水神話から三皇五帝の出現とその後の歴史に至る神話的叙事詩であつた。すでに歴史の波の中で失われて久しいと考えられていた中国古代神話が現在でも漢族のなかで保存されていたというこの報告は、当時文化大革命の空白期から新たな再生を果たそうとしていた中国神話学界に大きな衝撃と希望を与えた。ちょうどこの時期、河南省と浙江省の漢族のなかから相次いで伝承神話が発

見され、中国神話研究は從来から行なわれていた文献研究と一九三〇年代から始まつた少数民族伝承神話の研究に加え、漢族伝承神話の研究という新たな段階を迎えることになったのである。當時私もこの消息を聞き、いよいよ來たかと興奮した一人であつた。

神農架では最初の『黑暗伝』の発見から三年の間に、さらに八種の異なつた版本の『黑暗伝』が採集された。それと同時期に『黑暗伝』に関連するそのほかの伝承資料八篇も発見されている。それらは中国民間文芸家協会湖北分会によつて『漢族長篇創世紀史詩 神農架《黑暗伝》多種版本彙編』(一九八六年、武漢、以下『彙編』と略称)として集成された。拙論の目的はこの『彙編』に収められた各版本にもとづいて、『黑暗伝』が中国古代神話とどのような関係を持ち、また『黑暗伝』が中国古代神話研究にどのようなかたちで寄与し得るかを検証することである。

二 『黑暗伝』の性格

1 広義の神話

『彙編』に附された「序文」に、『黑暗伝』の版本である「黑暗大盤頭」を一読した中国神話学の泰斗袁珂が、

これを「極めて貴重な」「⁽²⁾漢民族の広義の神話叙事詩である」と評したことが記されている。『黑暗伝』は確かに貴重な資料だが、『彙編』が限られた研究者にしか配布されない内部資料であつたため、その発見の意義の高さにもかかわらず日本ではまだあまり知られてはいないようと思う。そこでこの袁珂の評語を借りて、この神農架『黑暗伝』といいういかにもまがまがしい名を冠せられた伝承資料の性格を説明しておく。

袁珂の評語は実は『黑暗伝』の二つの性格を言い表している。ひとつは「広義の神話」であり、もうひとつは「漢族の神話叙事詩」である。「広義の神話」とは、読みようによつては曖昧な表現ともとれるが、実はこれには当時中国神話学界を二分した「広義の神話」対「狭義の神話」という論争が背景にある。當時袁珂は中国神話の範囲を秦漢期までの文献に記録された古代神話に限定することを主張する「狭義の神話」論者に対して、魏晋六朝以降の志怪に類する記述や仏道二教の濃い説話なども「広義の神話」として研究の中に位置づけるべきだと主張して論陣を張つていた。⁽³⁾『黑暗伝』は紛れもなく神話的内容を伝える伝承だが、その字句には道教的神秘主義の色彩が濃厚であり、登場する神々の名を見ても

由来の定かではない仏教的・道教的な神がつぎつぎに登場している。同時期に河南省の漢族の中から発見された神話伝承（中原神話）や浙江省漢族の神話伝承（吳越神話）が、基本的には中国古代神話に登場する馴染み深い神々の物語であったのに対し、『黑暗伝』は民間における宗教的シンクレティズムを反映した文化的夾雜物が多く、その意味で「狭義の神話」とは認め難い。さらに、後述するようにその成立時期も早くて明代、あるいはそれ以降と考へざるをない。袁珂がこれを「廣義の神話」と呼んだのは『黑暗伝』のこうした性格を言い表したものである。そして同時にこの評語からは、諸君はこの『黑暗伝』を「狭義の神話」でないからといって等閑視するつもりなのか、という袁珂の声が聞こえてくるような気がする。袁珂という学者は、深い学識を持ちながら決して旧弊にとらわれることのない情熱家だと私は思っている。『山海經校注』（上海古籍出版社、一九八〇）と『山海經』（上海古籍出版社、一九八〇）という氣の遠くなるような精緻な労作をものしながらも、神話を古代という枠のなかに閉じ込めて考証するような学者ではない。案の定この論争はその後「廣義の神話」を認めるかたちで終結し、袁珂がその主張にもとづいて『中国神話史』（上海文芸出版社、一九八八）を上梓した

ことで「狭義の神話」を主張する声は、その後まったく聞こえてこなくなつた。そればかりか「仙話」や「鬼話」といった聞き馴れない用語によつて、神話の周辺にある伝承を民間文学研究のなかに取り込む方向で進んできている。

しかしそうした動きによつて『黑暗伝』の研究が進んだかと言えば、答えはノーである。同時期に発見され注目を集めた河南省の中原神話がその後研究が進み、すでにある程度の成果を収めているのに対し、『黑暗伝』は当初の採集者の意気込みにもかかわらず、いまだに初步的な評価にとどまつているのが現状である。「廣義の神話」とはなかなかの難物なのだ。

2 神話叙事詩——「唱本」

もうひとつ、「神話叙事詩」にも触れておこう。中原神話や吳越神話が物語（故事）として語られるものであつたのに対し、『黑暗伝』は「^{ハオツアオルオダ}草鑼鼓」と呼ばれる民謡や、葬送儀礼の中で歌われる「孝歌」「喪鼓歌」の形式で伝えられた七言体の「唱本」（歌詞テキスト）である。中国では西南少数民族のなかから数多くの唱えられ歌われる形式の創世神話が発見されている。これが

神話叙事詩（神話史詩）である。ところがそれまで漢族の間ではこうした形式の神話は発見されていなかつた。その意味で『黑暗伝』の発見は注目されるべきだというのが袁珂の評語のもうひとつの側面である。しかし『黑暗伝』は歌の形式で伝えられてはいても、その成立には複雑な歴史性が関わつており、西南少数民族の神話叙事詩と同じ意味で「漢民族の神話叙事詩」と呼べるような性格のものではない。私は学者袁珂をきわめて尊敬しているが、同時に時々行きすぎた民族主義的傾向があるとも思つてゐる。

現在発見されている『黑暗伝』はすべて「唱本」の写本であるが、本来こうした「唱本」は木刻本として流通していた。その間の事情を知るには『彙編』所収「原始資料附録之二」（以下、附録資料②と略称。同様に「原始資料附録之一」は附録資料①、「原始資料之一」は原始資料①というように略称する）が参考になる。この附録②は「孝歌」の形式で歴史を詠み込んだ『綱鑑』と呼ばれる正統的な歴史を歌いこんだテキストであり、『黑暗伝』そのものではない。だがそのなかに『黑暗伝』の流行を批判する内容が記されている。歴史派対神話派、

儒教的理性主義対道教的神秘主義の対立があつたようだ。

この『綱鑑』は道光九年（一八二九年）木刻本の写本であるから、これによつて十九世紀初頭には『黑暗伝』がすでにかなり流行してゐたことがわかる。その附録資料②に附せられた注記によれば、明代から清代にかけてこのような木刻本を刊行する書肆はこの湖北省西北部にも数多くあり、仏典・道教經典・善書・传奇小説・唱本などが大量に出回つていた。神農架にも民国十三年まで、「広福堂」という刻書社があつたといふ。『黑暗伝』はこうした出版メディアによつて一時期広く流行したと思われる。そこでふたたび「序文」を参照すると、『黑暗伝』は湖北省西部から四川省の巴山・巫山地区を含む省東部一帯にかけて広く伝承されていると説明されている。今このところ神農架以外の地域からの採集例が報告されないのでそれを確かめるすべはないが、かりにそうした広範な分布を示すとすれば、やはりかなりの量の木刻本が流通してゐたと考えてよいだろう。民間伝承とはいながら、『黑暗伝』は口頭伝承ではない。

『黑暗伝』の成立について、劉守華は明代に成立した可能性が高いと考えている。明代中期から後期にかけては道教が盛行し、文化的にも神仙怪異の説が流行した。そしてこうした時代風潮が古代神話の再編を促し、神話

を小説化した『開闢衍繹』（明・周游作）などが登場している。『黑暗伝』もこうした流れのなかから生み出されたのだろう、というのが劉守華の論旨である。⁽⁶⁾ はたして『黑暗伝』の成立が明代にまでさかのぼれるかどうかはわからないが、古代神話の再編成という観点は『黑暗伝』の性格をよく表している。だが再編成されているからといって、また口頭伝承ではないからといって、古い伝承が全て歪められ改竄されているとは限らない。拙論では第四章および第五章において『黑暗伝』のなかに、

古代神話に連なる古い伝承が隠されていることを論証するつもりである。

三 『黑暗伝』の創世神話

1 『黑暗伝』に見られるモチーフ

現在まで『黑暗伝』全伝を記した木刻本あるいはその版本は発見されておらず、『彙編』に収録された資料は、程度の差こそあれすべて不完全な写本である。全伝は未発見であるが、幸いにもその幻の原『黑暗伝』の写本を見たことのある老人がいたことが「序文」に紹介されている。その張樹藝と曹良坤というふたりの老歌手の記憶によれば原『黑暗伝』はおおよそ以下のようなもので

あつたという。主なモチーフごとに整理すると次のようになる。

「混沌」 天地の初めはただひとたまりの氣体が渦巻いていた。天地二気は形をとらず、まだ暗黒のなかを漂っていた。初めは水もなく、その水を作るために多くの神が幾年月の努力を重ねたが、ついに水を作り出すことはできなかつた。最後に「江沽」という神が水を作り出した。

「浪蕩子」 水ができたことによつて天が芽吹き、その若葉の上にひと雲の露が結ばれた。ところがその露を「浪蕩子」が呑んでしまつた。「浪蕩子」は死に、その身体は五つに分断され、五つの形となつた。

「盤古誕生」 こうして大地が生まれ、海ができ、崑崙山ができた。崑崙山から流れ出した血によつて盤古が誕生した。

「日月招来」 盤古は太陽と月を呼び寄せた。

「天地分離」 盤古は天地を闢き、そして死んだ。その身体は大地のあらゆるものに化生した。盤古の死後、地上の金石、草木、禽獸がさまざまの神となつた。この時にはまだ人類は生まれていなかつた。

「洪水」神々の間に抗争が起こり、そのため天地は暗黒に覆われ、ついに大洪水がおしよせた。洪水の中で黄龍と黒龍が生まれ、死闘を繰り広げた。そこに「昊天聖母」という神が現れ、黄龍に味方して黒龍を打ち負かした。黄龍は感謝のしるしに卵を生み、それを呑んだ聖母は、天をつかさどる神、地をつかさどる神、冥界をつかさどる神を生んだ。

〔兄妹婚〕洪水のなかで五匹の龍が大きな葫蘆をおしあただいて東海を漂つっていた。「昊天聖母」が葫蘆を

表
一

原始資料⑧	原始資料⑦	原始資料⑥	原始資料⑤	原始資料④	原始資料③	原始資料②	原始資料①	
1					1	1	1	【混沌】
					2	3	2	【浪蕩子】
	1	2		3		2	3	【盤古誕生】
	3	4	3	2				【日月招來】
	2	3	5	4		4		【天地分離】
		1	1	1	3			【洪水】
				4		4		【兄妹婚】

割つてみると、なから一対の兄妹が現れた。聖母は二人に結婚を勧め、その結婚によつてさまざまな創造神が生まれ、同時に血肉をもつた人間の世界ができたのである。

張樹藝と曹良坤の一老人の記憶による原『黑暗伝』の構成を手がかりに、『彙編』に收められた各版本（原始資料①～⑧）の内容を整理したものが表1である。上記の七つのモチーフが、それぞれの版本でどの順序で登場するかを示している。

これを見てわかるように、現存する『黑暗伝』はどれも原『黑暗伝』にあるモチーフから大きくはずれるものではないがそのモチーフの順序はかならずしも一定していない。そればかりではなくこれらの原始資料を比較対照してみると、現在伝えられて いる『黑暗伝』と原『黑暗伝』の間には、少なくとも二種類の系統の異なった版本が介在していたように思われる。そ

ここで次節では、『黑暗伝』のモチーフをもう少し具体的に紹介しながら、伝承のバリエーションについて考察してゆく。

2 一系統の版本

これらの原始資料のうち①は曾啓明という老歌手が一九四六年ころに仲間から借りた写本のごく一部分を書き写したものであり、完全なものではない。しかし前述の原『黑暗伝』の冒頭部分と内容的に一致する唯一の資料である。

混沌の母・幽泉は浦是を生んだ。母と子である幽泉と浦是が結婚し、万物のもとである泡瀧パオルオが生まれた。同時に汗清が生まれ、幽泉は滇汝に変じた。十六世代を通じて混沌が続いた。一世は幽泉、幽泉は浦是を生み、浦是は滇汝を生んだ。二世は江泡、三世は玄真、四世は泥沽、五世は汙水、六世は提沸、七世は擁泉、八世は泗流、九世は紅雨、十世は清氣、十一世は滌沸、十二世は重汙、十三世は涇汙、十四世は汎涇、十五世は洞汙、十六世代目に江沽が生まれた。江沽はもともとは「水爬虫」(サンショウウオ)のような両棲類を指すと思われる)であり、修練を積んで百丈あまりの龍の姿となつた。その江沽こそが水と土とを作り出した。

(欠落)

江沽には奇妙と浪蕩という弟子があつた。弟子一人がある日水に漂つていると、光を発する物体が見えた。近づいて見るとそれはとてもなく大きな蓮の葉で、なかに一しづくの露が揺れていた。浪蕩はそれが気に入り、呑み込んでしまつた。奇妙の報告でそれを知つた江沽は大いに怒り、「それこそが『生天根』なのじゃ。それなくして天がどうして生まれる!」と叫び、浪蕩を食いちぎつて死体を五つに分断し、海に投げ捨てた。すると海から崑崙山が生じた。崑崙は五匹の龍の形となり、五匹の龍は血水を吐いた。その血水には天地の精がこもつており、陰陽五形が凝集して盤古が大地の中央に生まれた。(欠落) (原始資料①)

次の原始資料②、③は内容的に非常に似通つてゐる。その特徴は「玄黄」という造物主が重要な役割を担つてゐるところにある。上記の原始資料①には、この「玄黄」の名は見えないが、あるいは欠落部分にそれがあつたとも考えられる。「浪蕩」の天地の根源物質「生天根」

盗みモチーフがこの三者に共通していることから、少なくともこの三者が同一の版本の系統に属していることは間違いないと思われる。

暗黒のなかに石龍老母がいた。老母の門人復元は法術に長けており、はじめて仙根を植えた。そこから玄黄老祖が生まれた。玄黄老祖が高さ九丈の黄色の石の台に座ると、光り輝く霞が世界を覆つた。そしてひとひらの青い雲が舞い降りると、それが崑崙山となつた。幾年月が経て崑崙山に五つの峰が生まれた。それは五匹の龍の形となり、龍の口からは赤い水が吐き出されて深い淵となつた。そこに仙胎が結ばれ、盤古が生まれた。

玄黄老祖には子義という弟子がいた。玄黄は子義に、崑崙山に宝物がある、それを取つてくるようにと言いつけた。子義がその宝物を手に取ろうとした時、突然現れた浪蕩子がそれを横取りしてしまつた。浪蕩子は子義が三度「だめだ！」と言うのも聞かず、それを呑み込んでしまつた。玄黄は怒り、「天を呑み込むとはなにごとじや！」と叫び、奇妙に命じて浪蕩子を斬刑に処した。五つに分断された死体は五つの方角となつ

た。左手は東、右手は西、左足は南、右足は北、首は中央となつた。そこへ盤古がやってきて、残つた胴体を斧で両断した。清濁二氣が分離し、初めて天地が生じた。（原始資料②）

青龍山は陰の地であり、崑崙は陽の山林であつた。この陰陽が交感して五色の瑞気がたち昇り、そこからひとつ円い物体が地上に落ちた。それは高さ九丈の黄色の石であり、一陣の清風が吹くとそれは九色の蓮華の台となつた。そこに玄黄が座つた。

青龍山から白い光が放たれ、それが崑崙から発する黄色い光と交わつて空中にひとつ円い物体が生まれた。風が吹くとそれは身の丈九丈の人の形になつた。玄黄は彼に奇妙という名を与え、門弟とした。

ある日二人は山の下の「地眼」（『彙編』原注では崑崙の墟とするがその根拠は不明）が光を放ち、青赤の二氣が渦巻いて円い物が地上に落ちるのを目にする。それは「滑塘」（『彙編』原注は生殖の門とする）に落ちぐるぐる回転している。玄黄は奇妙にそれを取つてくるように命じる。奇妙がそれを手にとろうとしたとき、天から舞い降りた浪蕩子が横取りし、奇妙が三

度「だめだ！」と言うのも聞かず、それを呑み込んでしまった。浪蕩子は東海の道法主・荷葉の命を受けてそれを取りに来たのだという。怒った玄黄は浪蕩子を斬り殺し、死体を五つに切り分けた。するとその内臓から不思議な物体が転がり出てくるくると転げ回った。

それは天地を育む精であり、三十三天界と十八層地獄のもとであつた。(原始資料③)

原始資料③はさらに続き、玄黄が「混沌」という名の猛獸を死闘の末に打ち負かし、それを「驪兜神」に封じる。その混沌にまたがつて進んでいくと一人の美女・媧かんとう神女に出会う。その神女はふたつの円い肉の塊(肉球)を携えており、玄黄が呪文を唱えるとその肉球から十人の男、十二人の女が生まれる。玄黄は十人の男に十干の名を与える、十二人の女には十二支の名を与えて夫婦となるよう命ずる。さらに玄黄は西方の泥隱子を弟子として、彼に「画天筆」「画地筆」「画人筆」という三本の鉄筆を与える。そして泥隱子はその筆で女媧・天皇・地皇・人皇・伏羲・神農・軒轅などを描き出した、という部分までその後は欠落している。驪兜神と肉球については後述する。

原始資料①②③が同じ系統に属することは見たとおりだが、もうひとつ原始資料⑦も同じ系統ではないかと思われる。その冒頭は次のようなものである。

暗黒と混沌のなかで青赤二氣が交感し、盤古がそこに生まれた。混沌のなかには泡瀧があり、それが青の氣を吐くと崑崙ができた。(原始資料⑦)

この混沌のなかにあるとされる「泡瀧」の名は、さきに紹介した原始資料①に見える。他の資料にはまったく見あたらないところをみると、この原始資料⑦と①はやはりなんらかの関係をもつてているようと思える。結論として原始資料①②③は確實に同系統の伝承がもとになつており、原始資料⑦もその系統に近いと推定しておく。

一方『黑暗伝』のもうひとつの系統とは、原始資料④⑤⑥である。これまで見た原始資料①②③では玄黄という神が造物主として活躍したが、原始資料④⑤⑥にはその名は見えず新たに「洪鈞」あるいは「弘鈞」と呼ばれる神が重要な活躍を見せる。そればかりではない。この『黑暗伝』の二つの系統は単に異なることにそれが互いに対すばかりでなく、さらに興味深いことにそれが互いに対

立する二つの伝承であつたことをも示唆しているのである。まず原始資料④を見ていただきたい。

海蛟が大洪水を引き起こし、この世にまだ人がいなかつたころ、立引子だけが蓬莱山にまきました。崑崙・蓬萊・大荒・泰山の四名山には人影もなかつた。

だが向かい合つた二つの山（原注では崑崙および陰山とする）から流れ落ちる水がぶつかり合い、その泡のなかから末葉が生まれた。陰山からの水流に水死体が浮かんでいた。そこから弘儒・弘皓・弘鈞が生まれた。弘儒の頭に載せた葫蘆から水があふれでて大洪水となつた。弘皓も頭に葫蘆を載せており、そこから黒い水があふれて地上を覆いつくした。弘鈞は女性であつた。立引子は自ら仲人となつて弘鈞を末葉に娶わせ、二人に結婚して人類を残せと言いつけて姿を消した。幾年月の後、末葉は葫蘆から緑の水を出して洪水を治めた。（原始資料④）

では造物主・玄黄の弟子とされ、三本の鉄筆を与えられたあの泥隱子にほかならない。それがこの原始資料④のなかでは玄黄に代つて初代の造物主として絶大な法力を発揮している。またここで泡から生まれ弘鈞を娶つたとされる末葉は「荷葉」^{モイエ}「麦芽」^{マイヤ}とも呼ばれている。「荷葉」とは原始資料③において、浪蕩子に命じて天地の精を盜ませようとした「東海の道法主」荷葉である。一方で造物主の助手に過ぎなかつた神が他方では造物主そのものとなり、一方で造物主に対する敵対者として登場する荷葉が、他方では創世神として重要な役割を果たしている。私が、原始資料③（②もこれと同系統）と原始資料④が対立する二つの伝承であつたと考へる根拠がこれである。さらにこの荷葉の別名「麦芽」はつぎの原始資料⑥のなかでは初代の造物主「麦芽老祖」として登場している。

混沌のなか、天地の中心にある山に麦芽老祖がました。山中に在ること十万八千年、時に洪水が襲つてきた。四十八母と呼ばれる神々が不周山で戦いを起こし、天を支える柱を折つてしまつた。元古老母は天河の水を放出し、天地を覆う大洪水となつた。麦芽老

ここで登場する立引子^{リインズ}は、「泥因子」^{ニインズ}「泥隱子」^{ニイシズ}とも表記される。湖北方言ではリとニ、Nとしを区別しないからこういうことになる。泥隱子とは先に見た原始資料③

祖は洪鈞と洪濛に天地を開くよう命じた。（原始資料

⑥）

原始資料⑤にも洪鈞の名が見える。この資料は途中欠落もあるが、原『黑暗伝』にあつたとされる二匹の龍の鬭争によって引き起こされる洪水と、その洪水から生き残った兄妹二人が結婚して人類の祖となるという兄妹婚型洪水神話をほぼ忠実に記録している。少数民族神話や中原神話との関係を考える上で重要な資料なので、やや詳しく紹介しておきたい。

水と金石から昊天聖母が生まれ、聖母は須弥洞にましました。聖母が靈山に赴いて下を望むと、山の下では黄龍と黒龍が鬭つており、地上は一面の洪水であつた。黄龍が形勢不利になつた時、昊天聖母は定天珠を用いて黒龍を打ち破り、洪水も治まる。黄龍は感謝して三つの卵を産む。昊天聖母はそれを呑み、定光（太陽神）、后土（冥府神）、娑婆（人神）を生む。（欠落）混沌が太荒山に着いて幾年月、太荒山に天を開く斧が現れた。混沌は盤古と改名し、斧で山上の「混沌石」をまつぶたつに切り開いた。清氣は昇り、濁氣は

沈んで天地が初めて生まれた。

崑崙の太陽洞には太陽神「孫開」が十二人の子供たちとともにいた。大陰洞には月神「唐末」が住んでいた。盤古はその崑崙山を斧で切り開いた。すると轟音とともに東方に太陽が昇つた。太陽は「天地が開けたばかりであちこちに妖魔がいる、私は妖魔が心配だ」と訴える。盤古は太陽を護衛するために「鷹龍」をつかわした。（欠落）

洪水の海のなかを五匹の龍が葫蘆を抱えて泳いでいた。洪鈞の声に驚いた龍は葫蘆を捨てて逃げ去つた。洪鈞がその葫蘆を拾い上げて割つてみると、兄妹二人が中から現れた。

二人が語るには、崑崙山に葫蘆が生え、それが洪水を予告して、葫蘆の中に隠れるように告げたのだと言う。洪鈞は一人を五龍氏と名づけ、結婚して子孫を残すよう勧める。妹は拒絶するが、金龜が現れて強く結婚を勧める。妹は怒つて石で龜を打ち碎いた。兄は八つに割れた龜の甲羅を合わせ、尿でそれを貼り合わせる。妹はあきらめて結婚し、男女十人をもうける。伏羲氏、神農氏、雲陽氏、祝融氏、葛天氏、人皇氏、燧人氏、軒轅氏、有巢氏がそれである。（欠落）（原始資

料(5)

神話と比較していくつかの問題について考察していくたいと考える。

これまで見てきてよう、原『黑暗伝』とされる版本が実際に存在し、かつその内容が張樹藝と曹良坤という

ふたりの老歌手の記憶のとおりだとすれば、現存する『黑暗伝』とその原『黑暗伝』の中間に、ふたつの異なる系統の版本が存在していたと推定されうる。ひとつは造物主「玄黄」を至高神とし、「浪蕩（浪蕩子）」の天地の根源物質盜みモチーフを伝える系統の版本であり、もうひとつは造物主「立引子」「末葉（麦芽）」を中心とし、「洪鈞（弘鈞）」が重要な役割を担う版本である。前章で前世紀初頭に歴史派対神話派の対立があつたらしいことを述べたが、神話派もかならずしもひとつではなかつたようだ。漢族の伝承というものはなかなか一筋縄ではいかないものである。ともあれ、今後の調査によつて、こうした伝承あるいは版本の系統などが明らかにされていくことを期待してもよいだろう。

さて、以上紹介してきた資料によつて、原『黑暗伝』にあつたとされるすべてのモチーフについて、その概略を了解していただけたと思う。そこでつぎに、これらのモチーフを古代神話や漢族の他の神話、また少数民族の

四 浪蕩モチーフと鱗の神話

『黑暗伝』の各モチーフのなかで、たとえば原初の混沌から天地が形成される過程などは明らかに道教的な陰陽五行思想の色彩が濃い。こうした五行思想を創世神話の中にもりこんだ例としては貴州省西北部のイ族が伝える⁽⁷⁾『西南彝志』や『宇宙人文論』などがよく知られている。またすでに紹介した盤古の天地開闢および次章で述べる兄妹婚型洪水神話も西南少数民族の神話や漢族の中原神話のなかに大量に発見されている。⁽⁸⁾ところが、原始資料①②③で見た浪蕩（浪蕩子）が天地の根源物質を盗むという実に印象的なモチーフについて、他地域の漢族、あるいは少数民族神話の中にも全く類例を見いだすことができない。その意味でこの浪蕩のモチーフこそそれがれていくことを期待してもよいだろう。

神農架『黑暗伝』を特徴づける最も重要な部分と言うことができるだろう。ならばこのモチーフはこの湖北省西部神農架の漢族によつて創出された、まったく荒唐無稽な神話なのか、それとも他の神話モチーフとなんらかの関係を持つものなのかという問題について考えてみなけ

ればなるまい。

『彙編』の編者は、このモチーフは「新奇で独特な神話であつて、古典のなかには見えない。おそらく長江流域の水郷地帯に起源したものであろう」というコメントを附している。だがほんとうにこのモチーフは古典神話と無関係と断言してよいものかどうか。それを考へるために、ここでその浪蕩のモチーフをもう一度整理してみよう。

天地いまだ定まらぬ混沌の時代、造物主が不思議な物体を発見する。それが天地の全てを発生させる凝縮された根源物質であることを見抜いた造物主は、助手

と無関係と断言してよいものかどうか。それを考へるために、ここでその浪蕩のモチーフをもう一度整理してみ

ることで注目されるのは原始資料①の、処刑され分断された浪蕩の死体が海中に投じられ、そこから崑崙山が出現したという説き方である。この資料の中で造物主とされる江沽の歴史が「水爬虫」が修練を積んで百丈あまりの龍となつたものだというところからしても、この混沌の時代は原初の大洪水、一面の水が地上を覆う世界であつたと理解される。江沽

表二

	造物主	助手	天地の精	盗み	処刑	化生
原始資料①	江沽	奇妙・浪蕩	蓮の葉の上の露	浪蕩が呑み込む	五切れに分断、海へ	海中に崑崙山が出現
原始資料②	玄黄老祖	子義	崑崙山上の珍宝	浪蕩子が呑み込む	五切れに分断	左手—東、右手—西、左手中南、右足—北、首—中央
原始資料③	玄黄	奇妙子	赤青二氣から生じた円い物	浪蕩子が呑み込む	五切れに分断	三十三天界と十八層地獄となる

に至る十五世

代の神々の名

の大半に「さ
んずい」がつ
いていること
からもそのこ
とがうかがわ

れる。そればかりではなく、浪蕩モチーフを含まない原始資料④⑤⑥でもさまざまな説き方で原初の洪水が語られている。これら『黑暗伝』の神話は道教的な神秘思想に彩色されてはいるが、それをはぎ取つてみればその根幹に残るのはさまざまの洪水の物語なのである。そして

その水の中に陸地を形成する原初物質こそが、浪蕩の盜んだ露や珍宝や陰陽のエネルギー渦巻く円い物体なのであつた。

そもそもこの原初の洪水から乾いた陸地を出現させる

までを語る洪水の神話は、中国古代神話の中で大きな位置を占めていた。すなわち鯀禹の治水神話がそれである。

『史記』夏本紀⁽⁹⁾や『尚書』堯典⁽¹⁰⁾の伝えるところをまとめるに、鯀は群臣の推举を受けて堯の命に従つて治水を試みるが、九年経つてもその成果をあげることができず、ついに羽山という場所で処刑されたことになつてゐる。鯀がこのように処刑された事実については『楚辭』天問⁽¹¹⁾をはじめとして諸書の記載の一致するところだが、その理由についてはいくつかの説がある。治水の成果をあげられなかつたためといふ『尚書』堯典のほかに、五行を乱したためとする『尚書』洪範⁽¹²⁾、その傲慢が原因だつたとする『國語』周語下・『呂氏春秋』恃君覽⁽¹³⁾などがそ

れだが、どれも歴史主義的な理に落ちた説明でどうも納得がいかない。一方神話の面影を残した記述として最も興味深いのは『山海經』海内經のつぎの部分である。

洪水、天に滔す。鯀は帝の息壤を竊み、以て洪水を堙ぎ、帝の命を待たず。帝、祝融をして鯀を羽郊に殺さしむ。鯀、復た禹を生む。帝、乃ち禹に命じ、卒に土を布き九州を定めしむ。

鯀が盗み出した「息壤」とはなにか。郭璞の注によれば「自然にどこまでも増殖する（自長息無限）土」である。『淮南子』地形訓ではそれを「息土」と呼んでいて、それを使つて禹が洪水を埋めて「名山」を造つたと言つてゐる。⁽¹⁵⁾こうして見ると、増殖して大地を作り出す「息壤」を盗んだがために帝に処刑されたという鯀の運命は、そのまま『黑暗伝』の浪蕩の姿に重なつてくるではないか。だが、浪蕩は処刑されたばかりではなく、その死体を分断されている。鯀の場合はどうであろう。

『呂氏春秋』恃君覽では、自分の待遇に不満を抱いた鯀が堯に対して反乱を企て、それがために処刑されることになつてゐるが、処刑の理由はともかく、それが斬刑

であったことを示している。

(舜) 是に於て之を羽山に廻^{まわ}し、之を副^そくに呉刀を以てす。

本来付属していたかどうかについては即断できない。なぜなら『黑暗伝』では天地創造のもう一人の立て役者である盤古が繰り返し登場しているからである。死体化生は本来この盤古の神話に特有のものなのだ。

『初学記』二十二に引く『開筮』では、呉刀で鯀を割いたところ禹が生まれたと言つているが、同じ『開筮』

でも上に引用した『山海經』海内經の郭璞の注に引用された字句によれば、解体された鯀は黄龍と化したことになつてゐる。⁽¹⁷⁾ このあたり伝承の異同があるにせよ、鯀が単に処刑されたばかりではなくその身体を分断されたという点では一致を見せてゐる。『黑暗伝』の浪蕩とこの鯀の処刑の間にも、偶然の一一致をこえた暗合があるようと思う。

もつとも浪蕩の身体は分断されたのちに、おそらくは彼が飲み込んだ天地の根源物質の作用によつて天空大地へと化生する。この展開はひとつのモチーフの結末として不自然ではない。彼の呑み込んだものが凝縮された天地の精であればこそ、そこから天地が形成されるのはむしろ必然と言つてよい。ただし、分断された浪蕩の肉体自体が天地へと化生するという話がこの浪蕩モチーフに

天地は混沌として鷄卵のようであった。そのなかに盤古が生まれた。一万八千年を経て天地が分離した。清く「陽」なるものは上昇して天となり、濁つて「陰」なるものは沈んで地となつた。天地の間で盤古は成長し、盤古の背が一丈伸びると天は一丈高くなり地は一丈厚みを増した。このようにして天と地はさらに遠く離れていった。さらに一万八千年のうちに現在のような天地となつていつたのである。

混沌のなかから陽と陰が分離して天地となり、それが盤古によつて決定的に分離されたという盤古神話は、『黑暗伝』のなかにほぼそのままの形で見ることができる。原始資料②と⑤の該当部分はすでに紹介してあるが、

そのほか、たとえば原始資料①では、浪蕩の身体が五切

り、足は西岳と為る。

れに分断され、海に投じられるとそこに崑崙山が出現し、さらに「一万八千年経つて盤古皇が生まれた。盤古の背が一尺伸びると天は一丈高くなつた。そして初めて清濁、陰陽が生まれた」。原始資料④では、「斧を手に盤古が行くと、道を阻む山があつた。盤古は斧を振り上げ山をまつぶたつに割つた。すると軽く清い氣は浮かび上がりて天となり、重く濁つた氣は凝り固まつて地となつた」というように、これらの内容はまさに『三五曆紀』そのものである。一方原始資料⑦では、盤古は「崑崙山にある天と地をつなぐ柱を斧で切り離し、それによつて清氣・濁氣が分離して天地となつた。やがて盤古は死に、その頭は五岳に、目は日月に、うぶ毛は草木に、血は河流に、頭は泰山に、足は西岳華山と嵩岳に、左腕は南岳衡山に、右腕は北岳恒山になつた」と言つてゐるが、これは任昉『述異記』上にあるつぎの部分に一致する。

さて今問題にしている処刑後の浪蕩が身体が崑崙山になつたり（原始資料①）、またはなはだしくは「左手が東の方角に、右手が西に、左足が南に、右足が北に、首は中央になつた」（原始資料②）という部分が本来浪蕩モチーフに付属していたものかどうか即断できないといふのは、これら盤古の死体化生モチーフが混線して流入しているのではないかと疑われるからである。それほどこの部分は古文献の盤古神話に酷似している。

ところで鯀の「息壤」盜みについて、大林太良氏はそれがユーラシア大陸北部から北米に広く分布する「潜水神話」の一種ではないかと推定したことがあつた。^{〔18〕}ウノ・ハルヴァによれば、「原海の存在を信ずることが前提」となつて「大地の素材が深い原海の底から運ばれてきた」という伝説は東ヨーロッパからシベリア、内陸アジアにかけて広く伝えられている。鯀あるいは浪蕩モチーフとの関係で特に注目すべきは、原海すなわち原の大洪水という觀念と、創造神の助手がその「大地の素材」を口の中に隠して盗もうとするという点である。アルタイの伝説ではつぎのように伝えてゐる。

昔、盤古氏の死せるや、頭は四岳と為り、目は日月と為り、脂膏は河と海と為り、毛髪は草木と為る。秦・漢の間の俗説にいう。盤古氏の頭は東岳と為り、腹は中岳と為り、左腕は南岳と為り、右腕は北岳と為

まだ水だけしかなかつた原初のとき、神と『最初の人間』は二羽の黒い鵝鳥の姿になつて原海の上を飛んで行つた。（神は悪魔を海底に潜らせ、土を持つてこさせる）神はそれを、「陸地となれ」と言つて、水の上に撒いた。だが神は『最初の人間』にもう一度土をとつてくるよう求めた。すると人間は、自分の分にも少しどつておこうと考えて両手に一杯、泥をもつて來た。片手一杯分は神に渡したが、片方のは、自分もこつそり陸地を創ろうとして口の中に隠した。神がもう一度泥を水の上に撒くと、たちまちにして陸地は拡がり、固まり始めた。ところが悪魔の口の中の泥も同様に、膨れたので、遂にそのために窒息してしまつた。悪魔はまたもや神の助けを求めねばならなかつた。神は「どういうつもりだつたのだ。口の中に泥を隠して、私に気づかれないで思つたのか。」と言つた。そこで悪魔は下心を白状して神の命ずるがままに泥を吐き出した。⁽¹⁹⁾こうして大地の上に苔の生えた丘ができる。

このようなモチーフはほかにも、アルタイ・タタールでは「人間が水にもぐつて行き、海底から土くれを口におぼつて持つてきた。人間はその一部だけを神に与え

て、残りは口に入れたままにしておいた」、ヤクートでは「燕がくちばしにくわえて持つてくる」、ロシアおよび北西シベリアでは「赤くびあび（水鳥）が草のような泥炭をくわえてくる」、東部フィンランドでは「悪魔が北極あびの姿になつて海底から土を運んできて、その一部を口に含んで隠す」など、口の中に隠して盗もうとするところに特徴がある。口の中に隠して盗むというのは、まさに大地の根源物質を呑み込んだ浪蕩の盗みそのものである。

潜水神話では増殖する土を口から吐き出すことによつて大地が形成される。浪蕩が身体を分断されたのも、実は彼が呑み込んだものを取り出すためであつたのではあるまいか。だとしたら、切り殺された浪蕩の「内臓から不思議な物体が転がり出て」そこから「三十三天界と十八層地獄」が形成されたという原始資料③（前出）の話の方が話の結末としては自然であるし、むしろこちらの方が本来の説き方であつたと思われる所以である。大林氏が鯫の神話をこの潜水神話と関連ありと睨んだのは氏の慧眼である。そして浪蕩モチーフは、鯫神話と潜水神話をつなぐミッシング・リンクと考えてよい。そのように考えれば、なにゆえに鯫が処刑されたばかりかその身体

を割かれねばならなかつたという謎もまた氷解するであろう。鯀もまた「息壤」を呑み込み、それゆえに「呉刀」をもつて解体されたのではないか。そして混沌たる

原海を乾いた陸地へと変貌させる神秘の土「息壤」が、鯀の体内で次世代の治水の英雄・禹となつて再生したのではないか。『黑暗伝』の浪蕩の話は、私をこうした空想に駆り立てるである。

さらに、これは蛇足に類する考証かも知れないが、原始資料③に玄黄が浪蕩を処刑した後、さらに「混沌」と

帝鴻氏に不才の子有り（略）天下の民之を渾敦と謂う。少眞氏に不才の子子有り（略）天下の民之を窮奇と謂う。顓頊氏に不才の子有り（略）天下の民之を檮杌と謂う。縉雲氏に才の子有り（略）天下の民之を饕餮と謂う。舜、堯臣となり（略）四凶族を流す。

杜注によればこの渾敦は『尚書』堯典に言う驩兜であり、窮奇は共工、檮杌は同じく鯀であるという。つまりこの二書の伝えるものは同一の事件であつたというのである。『黑暗伝』では「混沌」が「驩兜神」に封じられた。「混沌」すなわち「驩兜神」であるというのもこれで辻接が合つている。浪蕩のモチーフが鯀の神話であるとするならば、浪蕩とともに「混沌」あるいは「驩兜神」が、造物主であり至高神である玄黄に打ち負かされるという話も納得がゆくではないか。『黑暗伝』のこの特徴ある浪蕩モチーフは、古代の鯀神話に、そしてさらに遠くユーラシアに連なる民間伝承であるに違いない。

いるのと同じように、古代神話でも鯀と驩兜とは同時に

処罰を受けている。さらに『左伝』文公十八年にも似た記述がある。

五 兄妹婚型洪水神話と漢画像石

洪水を逃れた兄妹が結婚して人類の祖となるという兄妹婚型洪水神話は、中国神話研究が古文献の考証という段階から比較神話学へと飛躍するための原動力ともなった重要な神話である。中国では一九三〇年代末から、中国西南少数民族の伝えるこの形式の神話の研究がスタートし、現在までに相当数の類話が採集されている。これまでわかっていることによれば、中国におけるこのタイプの神話にはつぎのような三類型が認められる。

- (1) 宇宙創造のあと、地上の人間たちが近親婚などの勝手なふるまいを始めたことを怒った天神が洪水を引き起こす。神は善良な兄妹だけに洪水を予告し、兄妹は太鼓などに身を隠して洪水から生き残る。洪水のあと兄妹は占いを経て結婚し人類の祖となる。この懲罰洪水型の神話は主にイ族、ナシ族などイ語系に属する雲南省の少数民族に見られる。
- (2) 天の雷公と地上の英雄とが争たがいし、雷公は地上に落ちて英雄に捕らえられる。雷公は英雄の

子供である兄妹に助けを乞い、そのお札に洪水を予告し、葫蘆や南瓜の種を与えてそれを撒くよう告げる。洪水が起きると兄妹は葫蘆や南瓜のなかに隠れて生き延び、占いを経て結婚する。肉塊や瓜などの異形の子供が生まれ、それを切り刻むとひとつひとつの肉片が人間となつた。この闘争洪水型はミヤオ族、トン族、スイ族などの貴州省少数民族と雲南省の一部の民族の間に分布している。

(3) ある日幼い兄妹に村の石獅子や石龜が、まもなく洪水が襲つてくるからその時には自分の腹のなかに隠れなさいと告げる。洪水から生き残った兄妹は占いをして結婚するが子供が生まれない。そこで二人は泥をこねて人形を作り、それが人類となつて繁栄する。この形式は近年発見された河南省漢族の伝承、すなわち中原神話に特徴的である。

『黑暗伝』の兄妹婚型洪水神話は、この一番目の形式に近い。原始資料⑦では洪水の原因にはふれていないが、洪水のなかを五四の龍（青黄赤白黒）が葫蘆を抱えて泳いでいた、葫蘆の中には兄妹がおり、結婚して肉の塊を生み、そこから百人の人間が生まれたと言つている。

また、すでに紹介した原始資料⑤では黄龍と黒龍の闘争によつて洪水が引き起こされ、兄妹は葫蘆に隠れて生き延びることになつてゐる。原始資料③で混沌にまたがつた玄黄が、肉球を携えた「媧」という神女に出会い、彼が呪文を唱えると十男十二女がそこから生まれたといふ話、また原始資料④で葫蘆の中から水があふれ出して洪水になつたといふ話は、このタイプの神話が誤つて伝えられたものであろう。こうした特徴は貴州省少数民族のあいだに多く見られる闘争洪水型神話と一致しており、

この二者の間になんらかの関係があつたことを想像させる。ところがさらに面白いことに、『黑暗伝』の兄妹婚モチーフは中原神話の特徴も併せ持つてゐるのである。

原始資料⑦では、葫蘆の中から現れた兄妹は、自分が生き延びたのは、崑崙山に葫蘆が生え、その葫蘆が洪水を予告して自分の中に隠れるように告げたおかげだと語つてゐる。洪水を逃れるための乗り物が、自ら洪水を予告し、自分の中に隠れるように告げるというモチーフはまさしく中原神話の形式に属しているのである。そもそも神農架は、漢水の支流である堵河と長江の支流である沮水の両水系の中間に位置している。地理的には堵河から漢水を経る河南省へのルートと、沮水を下つて荆楚

の地へ至るルートのどちらもが開かれていた。長江中流域の荆楚地域が古くは南蛮と呼ばれる非漢民族の居住地であつたことを考えれば、神農架に闘争洪水型の特徴をもつた神話が伝えられていたとしても不思議ではない。むしろ中原神話のなかの兄妹婚モチーフは、貴州省少数民族がかつて荆楚の地にいたころ、その闘争洪水型の神話が神農架を含む湖北省西部の漢族に伝えられ、それがさらに河南省へと伝播して行つたと考えた方が順序として正しいのかも知れない。

神農架と河南省の伝承を比較する上でもうひとつ注目すべき資料が『彙編』に收められている。これを河南省の中原神話のひとつの典型的な伝承と較べてみたい。

洪水の後、萌蒿という場所に伏羲、女媧だけが生き残つた。伏羲は結婚を迫るが、女媧は拒絶し、西弥山の上で香を焚き、その煙が交わつたら結婚するといふ。果たして煙は交わつたが女媧は須弥山に隠れてしまい、伏羲がいくらさがしても見つからない。そこへ金龜が現れて、妹は松梅樹に隠れていると告げる。女媧は見つかって、結婚する。女媧は皮囊と肉屑を生む。中に五対の男女が入つていた。その後女媧はなぜ隠れた場

所がわかつたのかを伏羲に尋ねる。伏羲は「須弥山のふもとの石洞に金龜老道人がおり、問わず語りに教えてくれた。二人でお礼に行こう」と言う。女媧はその金龜に石をぶつけて粉々にしてしまう。伏羲は尿でばらばらの甲羅を貼りつけようとする。そこに真武神が通りかかり、一粒の薬を飲ませて命を助ける。この龜はもともと東海におり、蛇の精とともに民に禍をなしていたところを真武神に懲らしめられ、亀蛇二将の名を授けられたのだった。亀の身体には九宮と八卦の秘密が隠されており、それをもとに伏羲は八卦を作った。

(付録資料③)

昔、黄河のほとりの山に伏羲、女媧の兄妹が住んでいた。ある日河から一匹の大龜が現われ、それは一人の老人の姿となつて一人に洪水の予告をする。これから毎日川岸にひとつずつマントウを持つておいで。それが九百九十九個になつた時、川辺でわしを待つがよい。老人はそう言つて河に消えた。ふたりは言いつけ通りにマントウを運び、それが九百九十九個になつたとき天地が裂け、大洪水が襲つてきた。再び老人が現われるや龜の姿となつて、二人を甲羅の下にもぐりこ

ませた。そのなかは家のように広く、そして二人が運んできたマントウが湯気をたてて山のように積まれていた。それから二年十一か月と二十八日目、二人が表に出でみると天地はまだ完全には再生しておらず、東南の方向が欠けて、水はそちらに流れていった。女媧は天のほころびを補つたが、西北の天だけはつくろうのを忘れた。そのため西北の風はいまも冷たいのである。二人は玄元山に住んだが、その山の名が、後に訛つて軒轅山となつた。二人は石臼を転がす占いを経て結婚し、女媧は黄土をこねてたくさんの人形を作つた。ちょうどその時大雨が降り始め、あわてた女媧が泥人形をほうきで掃き集めたため、いくつかは壊れて後の身障者となつた。その後、女媧と伏羲は、子孫たちに龜すなわち玄武老人こそが自分たちの恩人であると説き、黄土で作った長男を黄帝として人類のリーダーとした。

天帝は玄武をその功により天神真武帝として北方を治めさせた。今、人が北に向かつて叩頭するのは、その真武帝を拝してのことなのである。(「玄武、女媧、伏羲和黄帝」⁽²¹⁾ 河南省沈丘県伝承)

私がここで注目したいのは、兄妹二人に結婚を勧め、それゆえ人類の恩人となつたのが「玄武」であつたという点である。玄武とは亀と蛇からなる、今風に言えばハイブリッドな靈獸である。付録資料③では玄武は亀と蛇という言い方をされているが、それこそが玄武である。

玄武とは青龍、朱雀、白虎とともに四神とされ、方角で言えば北方をつかさどり、宋代以降、道家はそれを「真武」として宗教的に取り込んでいる。私がこれにこだわる理由は、亀が兄妹二人に結婚を勧めるという話はほかにも類例がないわけではないが、これまでそれが玄武であつたと説く事例が見つかっていないからである。それが八十年代に至つて河南省と、河南省の伝承に關係の深い神農架で発見されたことで、これまで解釈のつかなかつた古代神話上のひとつの問題が解決できるかも知れないのだ。

その問題とは古代神話の伏羲と女媧を描いた漢代の画像石である。漢代、それも前漢末期から後漢にかけては、当時の厚葬の風をうけて大型の装飾墓を造営することが流行した。レンガや切り出した石を積み上げて構築された墓のなかでは、型押ししたレンガや石彫によつてさまざまな図像が壁面を飾つていた。レンガで作られたもの



図4



図3



図2



図1

を画像磚といい、石彫を画像石と呼ぶ。それら漢代の画像磚、画像石には当時の生活場面や宗教的神話的な図像が残され、古代史研究・神話研究に多くの示唆を与えている。人頭龍身の伏羲と女媧の像は、そうした図像の中でも当時最も好まれた題材のひとつであった。

一般に画像石のなかの伏羲と女媧は、男神である伏羲が陽を象徴して太陽とともに東の方角に、女神である女媧は月とともに西の方角に配置されるのが最もオーソドックスな形式である。ところがそうした規範性からはずれるような図像が、近年になって相次いで発見されたのである。それは伏羲と女媧像とともに玄武を描いた図像である（図1～図4）。本来東西軸を象徴する伏羲と女媧像に、なぜ北方を象徴する玄武が配されたのか。上記の漢族の伝承は、この問題を解く手がかりとなるかも知れないのだ。特に図2は上半身は人間、下半身は龍のようないきものである爬虫類の姿の伏羲と女媧が尾をからめている、つまり交尾（結婚）を示す図像だが、その尾が同時に玄武に巻きついている。これはこの二神の結婚が玄武を仲介としてなされたことを暗示している。

伏羲・女媧とともに玄武を配する画像は非常に珍しい。それが一例二例なら、まあ例外と認めてよい。また玄

武が伏羲と女媧を仲立ちするという話が一話だけなら見逃していたかも知れない。だがこれがこのようにわずかとはいえ数がそろつてくると、この二者の間に偶然をこえた結びつきがあつたのではないかと疑わざにはおれない。図1～図3の画像石は、河南省南陽から出土している。一方このタイプの神話が見つかったのは河南省沈丘県と神農架である。南陽はこの二地点のちょうど中間に位置し、どちらからも二百キロほどの距離に過ぎない。もちろん一方は現代の伝承であり、他方は二千年近い昔の図像である。距離は近くとも時間的には遠い。だが漢代において、すでにこの語り口の神話が漢族のなかにあり、それを図像化したもののがこれらの画像石であつたと考えることは可能であろう。

元來古代神話中の伏羲・女媧神話が、華南少数民族の伝える兄妹婚型洪水神話と密接な関係があることは聞い多をはじめとして多くの研究者の認めることである。基本的にそれは正しい。だが聞一多は、『楚辭』天問を囁矢とする伏羲と女媧にまつわる神話と少数民族の洪水神話は同じものであると考えていた。⁽²³⁾ ところが前漢までの記録では、伏羲と女媧が兄妹であったと明示した字句はひとつもない。そればかりか二人が夫婦関係にあつた

とする記録もまたひとつもない。その意味で聞

一多の考えは決定的な説得力を欠いていると言わざるをえない。伏羲・女媧が一对の夫婦神であると確認できるのは、漢代すなわち画像石の時代からである。こうしたことから私は、画像石の時代になつて兄妹婚型洪水神話が漢族のなかに取り込まれ、それまでの伏羲・女媧神話が再編成されたと考へることが、この問題に対する正当なアプローチであると考えている。⁽²⁴⁾ 伏羲・女媧とともに玄武を描いたこれらの図像は、まさしくこの時代に、玄武が伏羲と女媧の結婚の仲立ちをしたという形式の兄妹婚型洪水神話が漢族の間に伝えられたことを示しているのではないだろうか。

『黑暗伝』については、まだまだ論すべき点が多い。

天地創世の過程で登場するさまざまな神の名の由来につ

いては、『封神演義』や『開闢衍繹』などの明代以降の小説や俗文学のなかから探つてゆく必要があるだろう。

また神農架がその地形の険しさゆえに清末における白蓮教徒の拠点のひとつであつたといふことも、『黑暗伝』の成立を解明するひとつの鍵になろう。どちらも楽しみな今後の課題としてとつておきたいと思う。

注

(1) 一九七四年五月、神農架房県の農民が、山中で人間ほどの大きさの「直立歩行する動物」に襲われた。その報告を受けた中国科学院古脊椎動物古人類研究所は、一九七六年から八〇年にかけて三回の調査を行なつた。八年には中國人類学会の下に「中国〈野人〉考察研究会」が成立し、その後も多数の目撃証言のほか野人の足跡や体毛などが見つかっている。この消息は日本でも一九八〇年一月四日朝日新聞などで伝えられ、一時はかなりのブームとなつた。劉民壯『中国神農架』文匯出版社、一九九三、参照。

(2) 胡崇峻・何夥「我們追蹤漢民族的神話史詩——神農架『黑暗伝』序」『彙編』五頁

(3) この問題については袁珂「從狹義的神話到廣義的神話」(『民間文学論壇』一九八二年、第二期) 参照。

(4) 張振犁『中原古典神話流変論考』上海文芸出版社、一九九一。拙著「中原神話考」(『中国の歴史と民俗』第一書房、一九九一)

(5) 「薅草鑼鼓」とは、文字どおりの草刈り歌であり、トウモロコシ栽培を中心とした農作業に際して銅鑼・太鼓を伴奏として歌われる。その内容は多岐にわたり、花鳥風月、愛情婚姻などのほか創世神話や歴史故事などが歌い込まれる。「孝歌」「喪鼓歌」は葬送儀礼歌であり、死者を哀悼するのみならず、死者の靈魂の進むべき道を示唆し、結果として亡靈を超度することを目的としている。葬儀にあたつて歌手を招き、ふつうは一晩から三晩、名

家の葬儀ともなれば半月ほども歌が続くといわれる。蔚

家麟「神農架原始森林文化圈古朴的民俗」（『民間文学論

壇』一九九一年、第五期）参照。

(6) 劉守華「鄂西古神話的新發現」（『山茶』一九八五年第

五期、同著『口頭文学與民間文学』中国文聯出版公司、

一九八九に収録）

(7) 拙著「貴州省西南イ族のイ文經典にみえる『六祖神

話』の形成について」（『立教大学研究報告（人文科学）』

四七）、櫻井龍彦「混沌からの誕生—『西南彝志』を中心としたイ族の創世神話」（君島久子編『東アジアの創世神話』弘文堂、一九八九）

(8) 注4参照

(9) 當帝堯之時、鴻水滔天、浩浩懷山襄陵、下民其憂。堯求能治水者、群臣四嶽皆曰・鯀可也。堯曰・鯀為人負命毀族、不可。四嶽曰・等之未有賢於鯀者、願帝試之。於是堯聽四嶽、用鯀治水。九年而水不息、功用不成。於是帝堯乃求人、更得舜。舜登用、攝行天子之政、巡狩。行視鯀之治水無狀、乃殛鯀於羽山以死。天下皆以舜之誅為是。於是舜舉鯀之子禹、而使續鯀之業。

(10) 帝曰・咨、四嶽、湯湯洪水方割、蕩蕩聽山襄陵、浩浩滔天、下民其咨、有能俾乂。僉曰・於、鯀哉。帝曰・吁、弗哉。方命圮族。嶽曰・異哉、試可乃已。帝曰・往、欽哉。九載績用弗成。

(11) 鳴龜曳衡、鯀何聽焉、順欲成功、帝何刑焉。

(12) 鯀堙洪水、汨陳其五行。帝乃震怒、不畀洪範九疇、彝倫攸斁。鯀則殛死。禹乃嗣興。天乃錫禹洪範九疇、彝

攸斁。

(13) 其在有虞、有崇伯鯀、播其淫心、稱遂共工之過。堯用殛之於羽山。

(14) 堯以天下讓舜。鯀為諸侯、怒於堯曰・得天之道者為帝、得地之道者為三公、今我得地之道、而不以我為三公。以堯為失論、欲得三公、怒甚猛獸、欲以為亂、比獸之角能以為城、舉其尾能以為旗。召之不來、彷彿於野、以患帝舜。於是、殛之於羽山、副之以吳刀。

(15) 禹乃以息土填洪水、以為名山。

(16) 鯀殛死、三歲不腐、副以吳刀、是用出禹。

(17) 鯀死、三歲不腐、剖之以吳刀、化為黃龍。

(18) 大林太良『神話學入門』中公新書九六、一九六六、七一頁

(19) ウノ・ハルヴァ著・田中克彦訳『シャマニズム・アルタイ系諸民族の世界像』三省堂、一九八九、八三頁

(20) 村上順子「西南中國の少数民族にみられる洪水神話」（『東アジアの古代文化別冊一九七五』大和書房）。陶陽鍾『中國創世神話』上海人民出版社、一九八九。および注4参照。

(21) 張振犁、程健君編『中原神話專題資料』中國民間文芸家協會河南分會、一九八七、九三一九七頁

(22) 陳履生『神話主神研究』紫金城出版社、一九八七。こには伏羲・女媧像だけで八十七例が集成されている。

(23) 聞一多「伏羲考」（中島みどり訳注『中國古代神話』平凡社東洋文庫、一九八九）

(24) 拙著「女媧伏羲神話系統考」（『東方学』五十九輯、一

九八〇)

図版出典

図1 『南陽漢代画像石』 文物出版社、一九八五年、図二二四

(河南省唐河县針織廠出土)

図2 『南陽漢代画像磚』 文物出版社、一九九〇、図一六六

(河南省李湖縣出土)

図3 『南陽兩漢画像石』 文物出版社、一九九〇、図一七一

(河南省南陽市環城鄉王府出土)

図4 『文物』一九九一、第三期、二三頁 (四川省鄆縣鬼頭山出土)